

◆本薬師寺の調査 —1995-1・2・3次、1996-1次 本薬師寺出土の瓦

1 西塔・南面回廊の調査(1995-1次)

1 はじめに

本薬師寺に関する発掘調査は、1975年度の寺域西南隅の調査に始まって、金堂、東塔、中門、回廊におよんでおり、それぞれの位置、規模、基壇構造等が判明し、瓦などの出土遺物により、造営経過、存続、廃絶の状況、

さらには伽藍と藤原京条坊との関係などにかんする多くの知見を得ている。また、移建、非移建をめぐる論争に代表される平城薬師寺との関係についても興味深い新事実を提供してきている。

今回の調査は、以上のようなこれまでの成果をうけて西塔および南面西回廊の遺存状況の確認、規模、構造形式の解明などを目的として実施した。調査面積は、609㎡である。

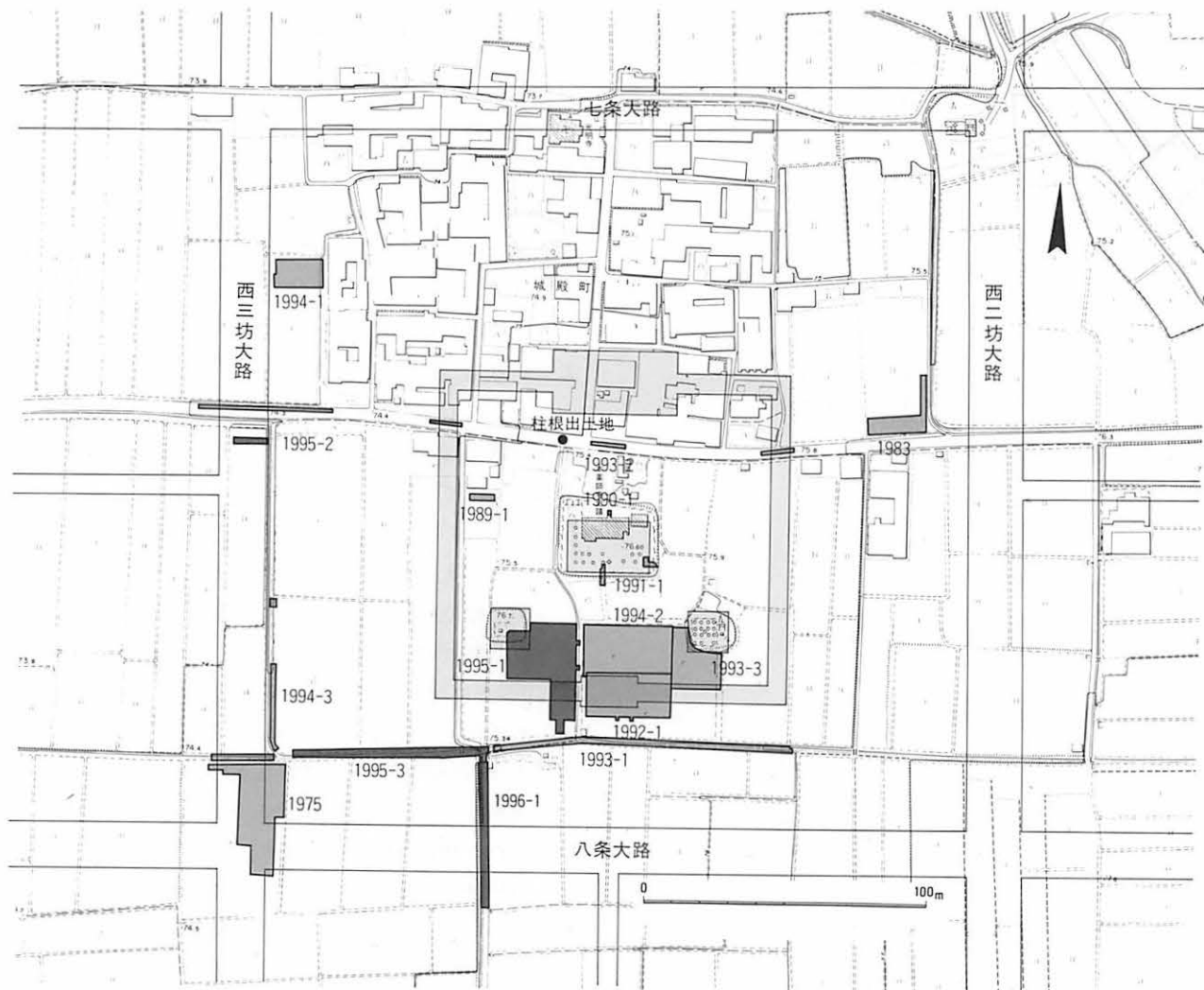


図21 本薬師寺調査位置図 1:2500

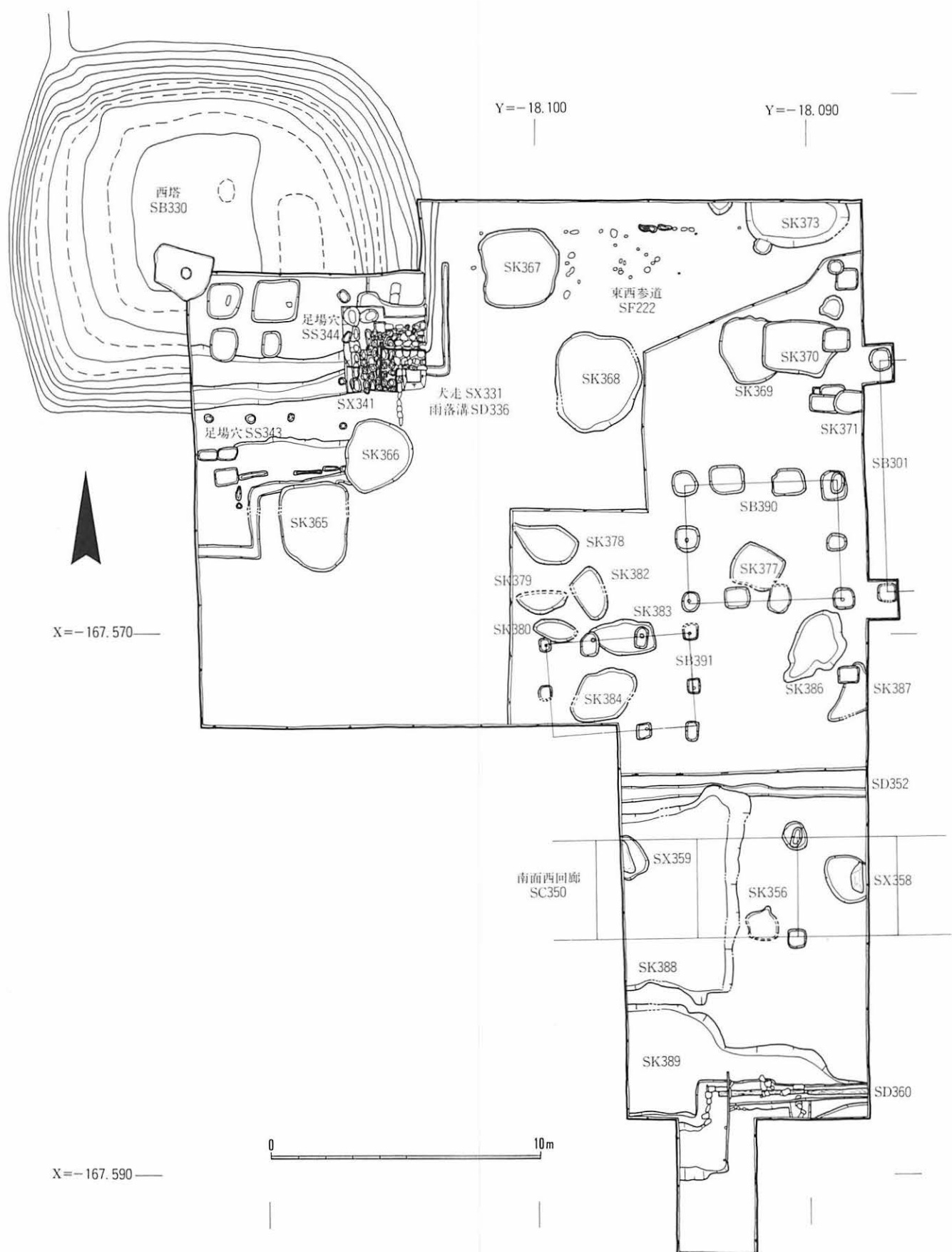


図22 本薬師寺1995-1次調査遺構図 1:200

2 基本層序

調査区の基本的な土層は、上から、水田耕土、床土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗褐色炭混り土などがあり、ベースの青灰色砂質土につづく。

西塔の南では、伽藍造営の整地土がよく残る。この整地層は、現状で厚さ約20cm前後あり、下半部は、茶褐色砂質土、上半部は、凝灰岩粉末や瓦小片をふくむ薄い数枚の層からなる。そのほかでは、後世の削平により整地層が失われ、暗褐色または、こげ茶色の炭混り粘質土が露出している部分が多い。このため、伽藍造営以前の遺構は、整地層のない部分では、これらの粘質土上面で検出した。

3 検出遺構

検出遺構は、本薬師寺の造営を境にして、大きく、その前と後の2時期に分かれる。

本薬師寺に関わる遺構

西塔SB330 西塔の現状は、水田中に大きな方形の土壇として残り、土壇中央やや南寄りに出柄を有する心礎が残っている。ほかには礎石を全く残していない。

調査では心礎を基準にして土壇の東南4分の1を発掘した。基壇の当初の面はこのとおりならず、心礎上面から約50cmまでは大きく削平されている。

礎石据付掘形 東南の四天柱とその東の側柱位置に、礎

石据付掘形を2箇所検出した。掘形は一边1.2~1.5mの不整形で、深さ約10cmを残す。柱間は、約2.4m。

礎石抜取穴 据付掘形の南に2箇所の穴がある。埋土には多量の瓦片が含まれていた。前述の掘形と南北の間隔は1.3mと狭すぎるなどから、南辺の側柱位置そのものではなく、側柱礎石の抜取穴の一部とみられる。

足場穴 基壇内東辺（心礎から5.8m）と南辺（同5.5m）に計7箇所の柱穴を検出した。直径約30~50cmの円形ないし楕円形を呈する。柱間は1.5~2m。柱穴の重複がないので建設時の足場穴（SS343・344）と推定する。

基壇外装 基壇東面には、地覆石抜取溝SX341があり、近辺に散乱する凝灰岩切石片の存在などから、基壇外装は花崗岩地覆石と凝灰岩切石の羽目石からなる切石積と推定した。

犬走・雨落溝 基壇の外側には玉石敷きの犬走と、玉石組の雨落溝がめぐる。ともに石の大部分は抜き取られている。犬走SX331は、基壇地覆石との間を2石の玉石をならべ、幅は約75cm。雨落溝SD336の底面からの高さは10cm、雨落溝は両側の側石とその間に2石を並べ、内側の縁石は犬走の縁石をかねる。幅約60cm、深さ約10cm。

階段 基壇の東面および南面に階段を検出した。東面階段位置には原位置をはなれた凝灰岩製の踏石が残る。周囲からは耳石の断片も出土している。南面階段は築成土



図23 西塔基壇犬走SX331(東から)

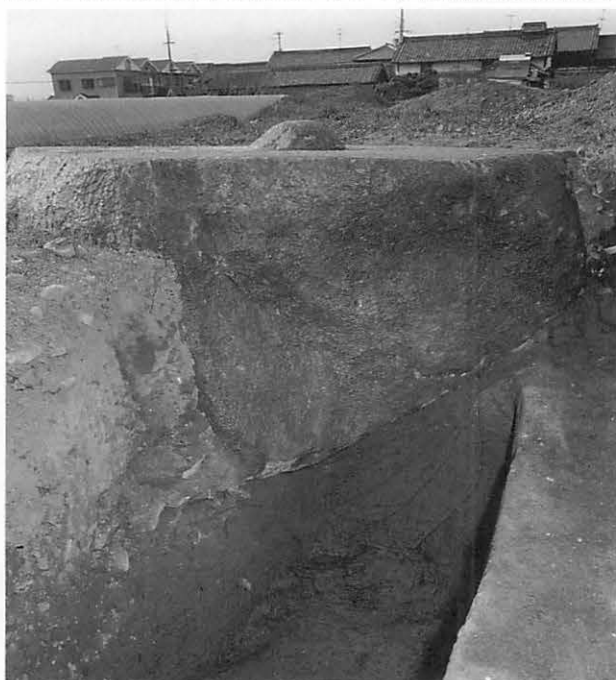


図24 心礎周辺、下面の攪乱状況(東南から)

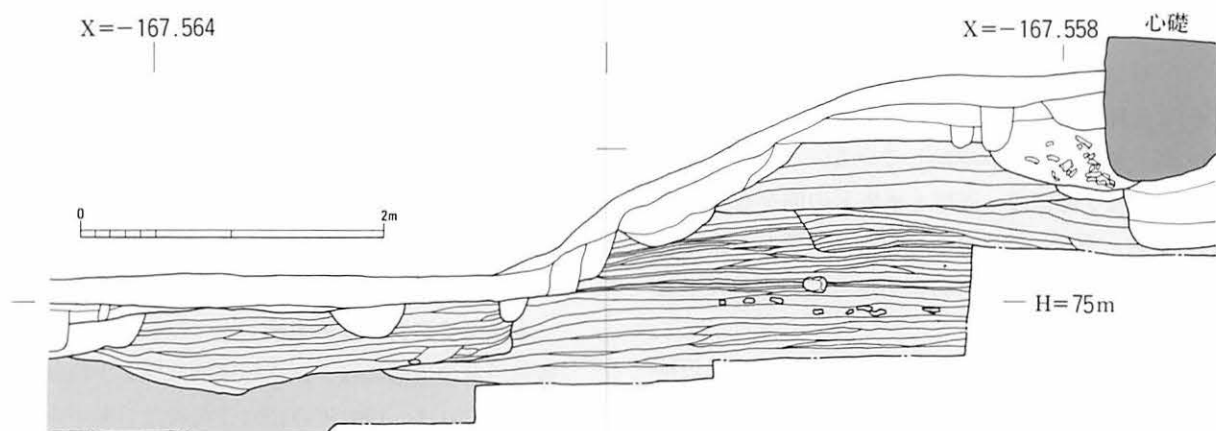


図25 西塔基壇南北断面図 1:50

までほとんど失われており、わずかに基壇外装の抜取溝を残すのみである。

階段規模の推定 東面の階段の出は、推定踏み石最下段縁からとると、約1.7mに復原できる。東階段の幅は推定復原で約3.8mである。

石敷 雨落溝の外側には石敷が広がるが、玉石の抜取痕跡をわずかに残すのみで、縁辺は不明確である。

基壇規模 推定基壇縁を犬走の敷石内法とみなして、心礎中心と結んでその距離を算出すると、基壇の一辺長は約13.5mとなる。

心礎 花崗岩製で、大きさは、東西2.1m、南北2.1mの不整形で、中心の出柄をのぞいて厚さが94cmある。中央の出柄は、直径約30cm、高さ10cm。

心礎周囲と下面は大きく攪乱され、攪乱坑には瓦片が投棄されている(図24)。この攪乱は西塔心礎の上面が現状で水平でなく、若干傾いていることとも関連するようである。

基壇築成 基壇築成は掘込地業と版築による。断面調査の所見によって、築成の工程を復原すると、まず、およその基壇範囲を版築した後、裾をカットして、階段部分を継ぎ足す。基壇築成土は、底面から約1.5mの高さまで残る。築成土は上半部と下半部とでは状況が異なり、下半部(約1.0m)では、一層の厚さが約3~8cmと比較的細かく版築するのに対して、上半部(約0.5m)は、一層の厚さが約10~15cmと分厚い。さらに、下半部について細かく見ると、その下半では、砂質土、粘質土の層をどちらにも似たような厚さ(6cm前後)で、版築するが、上半の版築では、粘質土は薄く、砂質土は厚いという特徴がみられる。

心礎の据付方法は、心礎周囲の攪乱坑のため、明確で

はない。版築土のなかから金堂創建瓦である軒平瓦6647Cが出土しており、西塔の造営が金堂の建設に先立つことはないことを示す重要な知見である。なお、版築にもちいている土は、灰褐色系の土であって、版築土に通例みられる黄褐色粘質土は使用していない。

南面西回廊SC350 調査区は中門西脇からかぞえて、1間目から3間目にあたる。礎石は残っておらず、基壇築成土の一部(茶褐色粘質土)と、礎石据付掘形、雨落溝などを検出した。

礎石据付掘形 中門の西側2間目の東側一対の柱位置に当たる礎石据付掘形2箇所を検出した。掘形は一辺0.8mの隅丸方形で、北側の1箇所には抜取穴をとまう。掘形の間隔は、約3.8m。

礎石落とし込み穴 調査区の東端壁と、西端壁にかかって、礎石落とし込み穴2箇所(SX358、SX359)がある。落とし込まれている礎石は、花崗岩製でいずれも一辺1mを越す大きさである。一面を平坦に整えている他は、柱座などの作りだしはない。出土位置から見て回廊の礎石とおもわれる。

雨落溝 雨落溝は、北側雨落溝(SD352)を検出した。側石は座っているものではなく、溝内に転落している。幅40cm、深さ20cm。両岸は護岸の玉石の抜取痕跡がある。南雨落溝は、削平と土坑によって破壊されている。

水路SD360 南面回廊の南側柱列位置から約5.7m南に検出した。東から西5.5mまでは木樋暗渠が設けられており、あとは開渠となる。暗渠の西端は木板と凝灰岩切石組みによる南北溝(長さ3m、幅0.6m)に開口する。この南北溝は南端で西に折れ約2mに幅を広げる。南北両岸は護岸の石の抜取痕跡が並ぶ。木樋は発掘区東外へ1m以上は東にのびている。

SD360は回廊南辺の整地過程でつくられ、厚い奈良時代中頃の灰色粗砂で覆われ廃絶している。

東西石敷参道SF222ほか 西塔と東塔との間をむすぶ東西方向の石敷。今回の調査区では、削平が著しく遺存状況は悪い。北側の縁石と内部の敷石部分にわずかに玉石の風化した痕跡をとどめる。

土坑 回廊以北に検出した多数の土坑は、検出状況や出土遺物の様相から、本薬師寺造営に関わる土坑と、本薬師寺造営以前の2種類に大別される。後者の土坑については、次項で述べる。

まず、参道位置とその周辺にあるSK369、SK370、SK373などについて述べる。SK370は、多量の木屑とともに、フィゴ羽口などの鋳造関係遺物が出土した。参道北端から北に広がるSK373からも木屑が出土している。参道石敷下にあたる土層で検出され、西塔造営時あるいはその後の寺の改修時にもうけられた土坑とみられる。なお、SK369・370については、東西参道と重複して見つかったり、幡竿のようなものをたてる施設かと考えられている穴SX277・280（『藤原概報26』）と、伽藍中軸線をはさんでほぼ対称の位置にあるので、同様の性格を有する土坑かとも推測される。

西塔の周辺と参道位置にあるSK365、SK366、SK367、SK368にふれる。いずれも一辺2.6～3.5mの大型の土坑

で、深さは、SK368が約0.3mと浅いほかは、1～1.3mと深い。いずれの土坑にも大量の瓦が投棄されているほか、SK365には、基壇外装や雨落溝や、犬走などにもちいたと思われる花崗岩などの玉石や、凝灰岩断片などが含まれていた。

本薬師寺造営以前の遺構

造営以前の遺構には、掘立柱建物3棟と土坑群がある。南北棟SB301は、1994年の1994-2次調査で東半分が検出されていた桁行4間の南北棟建物で、今回、西北と西南の柱位置を確認したことにより梁間が2間と確定した。桁行総長が8.4m、梁間4.2mである。柱間は桁行、梁間とも2.1mである。SB390は、3間×2間の東西棟で、桁行総長5.5m、梁間4.4mである。掘形は一辺0.6～1.2m。SB391は、3間×2間の東西棟で、桁行総長5.4m、梁間3.2m。掘形は、一辺30～40cmで、先の2棟と比べ、小型である。

これらの建物は、方眼方位に対して西で南に振れている。

これらの建物に重複あるいは近接して多数の土坑が分布する（SK377～380、382～384、386、387など）。土坑埋土は炭化物をふくむ暗褐色粘質土である。7世紀後半の土師器、須恵器が出土した。



図26 水路SD360（木樋暗渠の西端と石組 左：北から、右：西から）

4 出土遺物

大量の瓦類のほか、土器、土製品、金属製品、石製品などがある。

瓦類 別項に詳述したので参照されたい（33～37頁）。

土器 弥生時代から鎌倉時代までのものがある。寺造営以前のものと、寺の変遷にかかわるものに分けられる。前者では下層土坑SK377等の出土土器、後者では、西塔基壇築成土、西塔南の土坑SK365、SK366、東の土坑SK367～SK369、回廊を壊す土坑SK388、水路SD360出土土器が重要である。

下層土坑の土器は、1994-2次調査区のSK270や西三坊坊間路側溝出土土器と同じ7世紀後半代に属する土師器、須恵器があるが、その中に長方形透しが疎らに入る須恵器円面硯1点が含まれる。寺造営以前の右京八条三坊西南坪の性格を推定する上で重要である。

西塔基壇築成土には上半部、下半部ともに少量の飛鳥IV～Vの土器が含まれているが、最も新しい資料が奈良時代に入るかどうかは判別できない。

西塔東南隅の土坑SK366と東西参道下の土坑SK367からは本薬師寺の古式の瓦とともに飛鳥IV～Vに位置づけられる少量の土器が出土した。とくに土坑SK366は西塔基壇と重複する位置にあり、西塔の造営が他の堂宇よりも遅れることを示しているが、基壇土出土土器ともども、その年代観は微妙であって限定できない。

土坑SK368、SK369には奈良時代末、9世紀末から10世

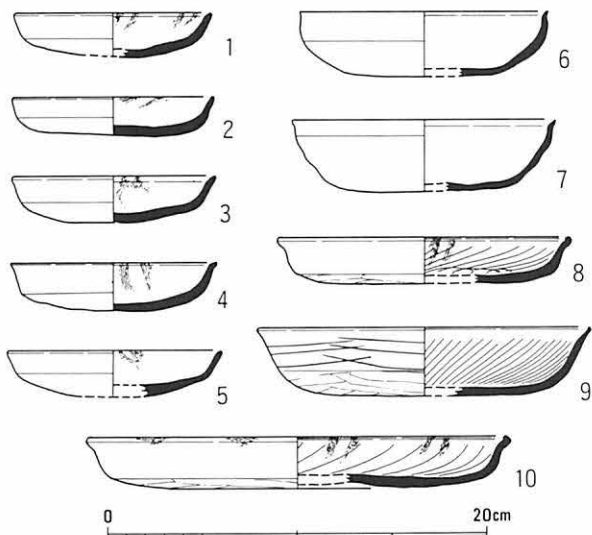


図27 SD360出土土器 1:4

紀初頭の土師器杯・皿・黒色土器碗などが含まれる。1994-2次調査区の土坑SK272等に類似した改修時の土坑と考えられる。

回廊を壊す土坑SK388からは10世紀代の土師器杯A、甕等とともに中国銅官窯の青磁壺片が出土した。

図27に示した土器は、水路SD360の石組開渠部分出土の土器で、奈良時代中頃（平城Ⅲ）に位置づけられる土師器杯A（9）、皿C（1～5）、碗C（6・7）、皿A（8・10）、甕、須恵器杯A、皿などがある。多くに灯明の痕跡がみられ、その頃確実に寺院活動が行われていたことを示している。

SD360の木樋暗渠埋土からは内面に「□[朋カ]」の墨書がある須恵器杯B蓋が出土した。蓋は、飛鳥IVに位置づけられ、木樋の埋設時を示す。

土製品 下層土坑出土を含めて円面硯2点、蹄脚硯1点がある。また、SK370からはルツボ、フイゴ羽口、回廊北雨落溝SD352から土馬1点、包含層から土製円盤4点などが出土している。

金属製品 金銅製垂木先金具、銅釘などがある。金銅製垂木先金具（図28）は、西塔東面地覆石抜取溝SX341内から出土した。直径10cmの円形金具で、ほぼ完形である。中央に小孔を穿ち、4葉の対葉花文を透し彫りし、毛彫りで輪郭線を刻む。寸法からみて裳階屋根の地垂木用と思われる。円形金銅製垂木先金具は平城薬師寺からも出土している（『薬師寺発掘調査報告』1987年、PL.120-25）が、本例は、対葉花文の間の蕾状の文様を欠くなど、

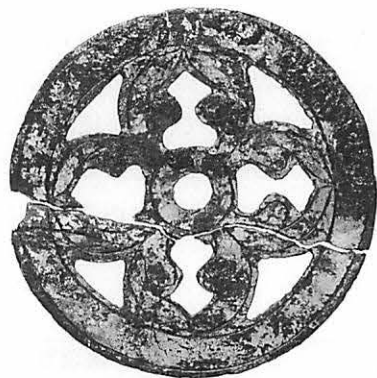


図28 垂木先金具 1:2

より退化がすすんだものとみられる。銅釘は、笠型の頭部（径1.0cm）がつく断面方形の釘で、完形品でみると全長4.2cmある。SX341やSK367などから約20点出土している。

石製品 西塔の足場穴SS344から砥石1個が出土した。

5 まとめ

今回の調査の成果と課題にふれまとめとする。

まず成果としては、西塔の規模、基壇の構造が明らかになったことがあげられよう。

基壇の規模は、本薬師寺東塔、平城薬師寺西塔とほぼ同規模である。ただし、基壇周囲の犬走、階段部などの大きさに若干の違いがある（表2参照）。

基壇外装は、花崗岩地覆石と凝灰岩の羽目石からなる切石積である。基壇上面の舗装は不明で、裳階の礎石あるいは据付穴などは見いだせなかった。ただし、西塔所用とみられる裳階用の軒瓦、丸・平瓦が出土していることや、裳階垂木用の金銅製飾り金具の出土からも、西塔に裳階があったことは確実である。

心礎がほぼ原位置にあることも判明した。ただし、心礎上面が水平でなく、若干傾いている。心礎の下や周囲に後世の攪乱がなされていることから、若干上下に移動している可能性もあるが、ここでは、大きく動かされていないという指摘にとどめておきたい。

この攪乱については、時期を明示する資料はないが、永長元年（1096）に本薬師寺塔跡から舍利をほりだしたとの記録（『中右記』）が想起される。実際には、舍利孔を有するのは、東塔心礎のほうであるが、その際、舎利の探索は、西塔にもおよんだ可能性もあろう。

西塔の造営時期については、まず出土瓦の様相がてがかりとなる。本薬師寺の主要堂塔の造営順序にかんしては、これまでの調査によって、第一段階として金堂、第二段階として東塔、中門、回廊となることが知られている。今回の調査によって判明した西塔の瓦はそれらより

更に遅れる段階のもので、第三段階に位置づけられる。奈良・平安時代に属する軒瓦も出土しているから、西塔は、平城遷都後にも存在していたことは確実であるが、創建時期については、瓦の年代観が重要な問題となる（瓦の問題については33～37頁参照）。

回廊については、瓦は、南面東回廊と同様の様相を示す。回廊の廃絶については、回廊を破壊してもらうけられた土坑の遺物などから、これまでの調査による推定と同様に、ほぼ11世紀代と見てよいと思われる。

出土遺物にかんしては、塑像の問題がある。本薬師寺からは、かつて塑像の出土が伝えられているが、東塔周囲の調査につづき、今回の西塔の調査でもまったく出土しなかった。本薬師寺で塑像がまつられていた可能性はほとんどなくなったといえよう。

下層の本薬師寺造営前の遺構にふれる。下層建物は、今回の調査で新たに2棟の存在が明らかになった。これらの建物は多少の時間差はあるにしても、先の調査で明らかになった堀や、建物とともに右京八条三坊西南坪に展開する一連の遺構とみられる。藤原京の条坊の設定から、本薬師寺の造営までの間に一定の時間の経過があったことを遺構の上でも示している。

本薬師寺といえば、薬師寺式伽藍配置としてわが国で初めて2基の塔をそなえた伽藍としてあまりにも有名である。今回の調査によって西塔の造営が他の堂塔に比してかなり遅れることがわかったことにより、2基の塔が並立した時期については、藤原宮期でおさまるのか、あるいは平城薬師寺造営以後にまでくだるのかなど、大きな問題を提起することになった。この解明のためには出土瓦をはじめとする平城薬師寺との比較など、より詳細で多角的な検討を要する。

西塔の未調査部分をふくめ今後の伽藍のより広い範囲の調査に期待しておきたい。（千田剛道 土器：西口）

表2 塔の規模の比較 単位：m

	基壇長	基壇高	雨落幅	犬走幅	階段幅	階段出	石敷規模	参道幅
本薬師寺 西塔	約13.5	1.65	約0.6	約0.75	約3.8	1.6	不明	約3.4
〃 東塔	約14.2	1.45	約0.6	約0.6	約4.1	1.65	約21.8	約3.4
平城薬師寺西塔	13.65	1.4	約0.6	約0.6	約2.9	1.8	約20.8	—

2 寺域西限の調査 (1995-2次)

本調査は、農業用倉庫新築に伴い実施したものである。調査地は本薬師寺寺域の西北部にあたり、寺域の西を限る大垣およびその外側を南北に走る西三坊大路の存在が予想された。このため調査では、東西12m、南北2mの発掘区を設定した。調査地の基本的な土層は、上から耕作土、床土、黄褐色土（西半では部分的に灰色微砂層）で、遺構は地表下約30cmにある黄褐色土上面で確認した。

調査によって検出した遺構には、南北溝2、土坑1と中世の耕作溝多数がある。東側で検出した南北溝SD401は、幅0.8m、深さ0.15mとやや小さく、西側にある南北溝SD402は、幅1.75m、深さ0.3mと大きい。ともに約2m分を検出した。溝SD402の埋土の上部には、瓦片が含まれていた。溝SD401の西側で検出した土坑SK405は、一辺75cmの柱穴状の遺構であるが、深さ10cm程度しか残存しておらず、性格は不明である。

検出した2本の南北溝は、当初の予想通り、西三坊大

路SF102の両側溝と理解するのが適当であろうが、その心心間の距離は6.5mと短く、断定するには至らない。これまで知られている奇数条坊大路の幅員は、8.5m前後が一般的であり、今回の6.5mという数値はむしろ小路の幅である。遺構の規模や近隣の調査成果からすると西にある溝SD402が、西側溝の可能性が高いが、だからといって、東の溝SD401が、側溝ではないとも断定できない。いずれにせよ、今回の調査面積は狭小であって、これ以上土推測を重ねても空論となる。事実のみを記して今後の調査の進展を待ちたい

なお瓦は、溝の埋土である暗褐色土などから、6276Aa(2点)、6647I(1点)、6641(H?1点)の計4点の軒瓦が出土した。6647Iは、瓦当がほぼ完存するが、他は小破片である。6647Iは、5回反転の右偏行忍冬唐草紋で、上外区の珠紋数が16、下外区の線鋸歯紋数が27。金堂所用裳階用の軒平瓦である。また丸瓦は計29点(2.8kg)、平瓦は計112点(6.3kg)が出土している。

(黒崎 直)

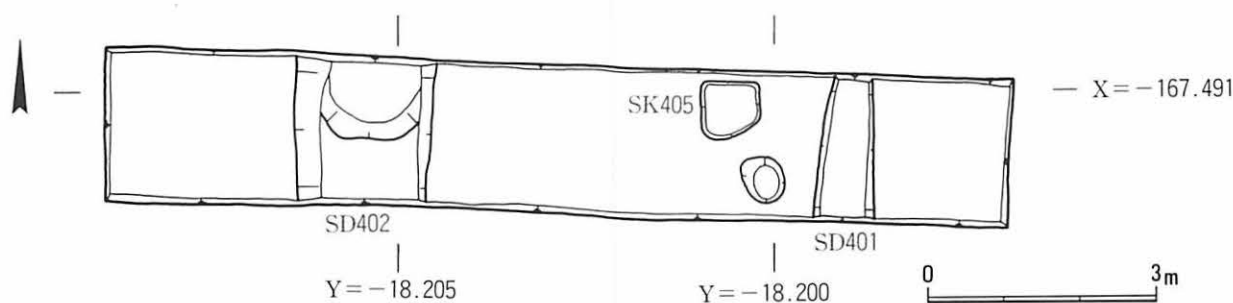


図29 本薬師寺1995-2次調査遺構図 1:100

3 寺域南辺の調査 (1995-3次)

この調査は、農業用水路改修にともなうもので、調査地は本薬師寺回廊西南隅の南約20mの位置から、幅3mで西に向かい総延長約65m、調査面積は、211㎡である。

水路工事により、大部分の場所では、ベースの暗灰色粗砂層や灰色粘質土まで掘削されており、瓦溜1箇所をのぞき、顕著な遺構は残っていない。瓦溜SX410は、調査区の東端に近い部分にあり、東西3.5m、南北1.5m、深さ50cmの土坑状を呈し、さらに調査区の北へ広がる(図30)。埋土には、多量の本薬師寺創建期の瓦(33~37頁参照)のほか多量の木屑が含まれていた。伽藍造営のごく初期の整地に関わる遺構であろう。

(千田剛道)



図30 瓦溜SX410 (南から)

4 寺域南限・八条大路の調査 (1996-1次)

この調査は、農業用水路改修にともなう事前発掘調査として実施したものである。

調査位置は、本薬師寺の伽藍中心線からは西へ約40m、西塔基壇から南へ40mほど離れる。

調査区の北端から22mは本薬師寺伽藍地内に属し、南端から13mは藤原京右京九条三坊の西北坪にかかり、この間に八条大路が想定される。

調査区は、1995-3次調査区東端から南へ続く南北52m、東西3mで、調査面積は156㎡である。

調査区のうち東側約1mは、現水路の堆積が遺構面近くまで達している。

調査区の基本層序は上から、耕土、旧耕土、暗灰色砂、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土（地山）で、水路西側の水田耕土上面から90cm下の暗褐色砂質土面で遺構検出をおこなった。

検出した主な遺構には、旧流路、東西溝1、柱穴4、土坑1がある。

旧流路SD424は、調査区のほぼ中央、南北19mにわたって、灰色砂層を主体とする堆積が認められる。検出長が

短く勾配は測定できなかったが、周辺の微地形からみて北東から南西へ流れるものと考えられる。

八条大路関連の遺構としては東西溝SD425がある。SD425は、幅2.8m、残存深さ40cmで、南岸に比べて北岸は緩勾配である。溝底の中央北寄りの幅0.7mほどがわずかに深い。1975年度調査（本薬師寺第1次『藤原概報6』）で検出したSD104の延長上にあり、八条大路北側溝にあたると考えられる。

1975年度調査では南側溝SD103も検出しているが、今回の調査区では断面観察でもその存在は確認できず、削平されたものと考えられる。

本薬師寺伽藍地内では、単独の柱穴2を検出した。八条大路北側溝SD425の北1mにある柱穴SX426は、掘形が南北70cm、残存深さ40cmほどと小規模である。本薬師寺伽藍地南辺の閉塞施設にともなう遺構の可能性もあろう。

右京九条三坊西北坪では、柱穴1、土坑1を検出した。柱穴SX422は、南北65cm、東西50cmで、性格は不明である。

土坑SK420は、南北2.2m、東西0.2m以上であるが、遺物をともなわず、時期や性格は不明である。

出土遺物は、きわめて少なく瓦数点のみ。そのなかに熨斗瓦1点を含む。（長尾 充／遺構）

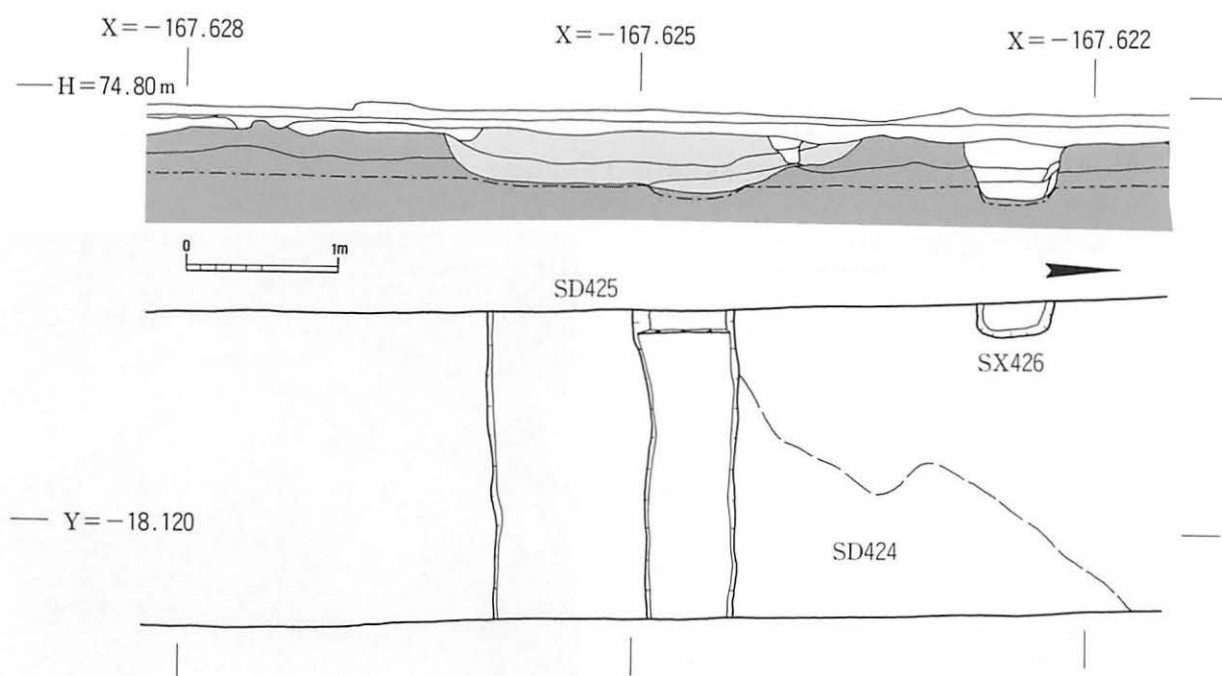


図31 本薬師寺1996-1次調査遺構図・土層図 1:50

5 本薬師寺出土の瓦

1995年度と1996年度に実施した本薬師寺の調査のうち、1995-1・3次調査で出土した瓦について報告する。

1995-1次調査出土瓦

軒瓦、丸・平瓦、道具瓦がある。軒瓦は軒丸瓦169点と軒平瓦178点の合計347点。道具瓦は面戸瓦67点と熨斗瓦255点。平瓦には刻印平瓦が2点ある。丸瓦は破片数で12,765点2,107kg、平瓦は50,036点13,519kg出土した。

軒瓦 表3に示したように、調査区内で出土した軒瓦は調査区中央付近を境にして南北で内容に違いがある。南は南面西回廊の瓦、北は西塔の瓦とみて分析する。

調査区中央付近より南では、軒丸瓦6276Aa-軒平瓦6641Hの組合せ(図33-1・2)が8割を占めている。中門・南面東回廊での成果もこれと同じだった(『藤原概報24』)。この組合わせが南面回廊の所用軒瓦である。

調査区中央付近より北の西塔所用軒瓦の様相はこれまで調査された堂塔とは違う。本屋根用軒瓦は6276Aa-6641Hが多いが、6276Ab・Ac(図33-2・9)もその約半数ある。これと組み合う軒平瓦は6641O(4)。6641Oは、前回の参道の調査(『藤原概報26』)では、「6641新種」と報告したが、平城宮馬寮出土品(『平城報告XII』PL.54)との同范を確認した。上外区に珠紋、下外区と脇区に線鋸齒紋をおいた右行の偏行唐草紋で、6641Gに似るが単位数11は2単位多い。6641Gと6641Oの内区紋様を比較すると、左から6単位目の唐草紋2つの巻きが逆転し、7単位目の唐草紋が2葉構成となる点が共通する。Gの紋様の右側(8単位目の次)に2単位分を加えてOを作範したのだろう。上外区の珠紋数20もGの19に近い。内区の左端には范割れがあり、これは平城宮馬寮出土例より本薬師寺出土例の方が進行している。平城薬師寺では6641Oの出土は確認されていない。

裳階用軒平瓦は6641I(8)が6641K(6)をしのぐ点数出土した。6641Iは単位数9の右行偏行唐草紋。平城薬師寺創建瓦の一つ。単位紋は基本的に3葉構成で6641Kより祖形に近いが、これは平城薬師寺造営時に復古的な紋様を採用したからで、藤原宮式の紋様をもつ6641Kがより古い。裳階用軒丸瓦は6276E(5・7)。瓦当厚3cmあたりを境に、薄いもの(薄型)と厚いもの(厚型)に分かれる。薄型の初期段階では表出されていた蓮



図32 ヘラ書き熨斗瓦 1:3

子周環は厚型にない。過去の調査で出土した6276Eはほとんどが薄型だった。ところが、西塔周囲では厚型が圧倒的多数。胎土・焼成の共通性などから、6276E(薄型)が6641Kと組み、6276E(厚型)は6641Iと組み合う。

その他に、軒丸瓦は6304E、薬師寺32型式と36型式などが出土した。6304E(10)は瓦范が著しく磨耗する。以前に東塔で出土したものも同様に紋様が模糊とした個体だった。セットになる軒平瓦6664Oはない。薬師寺36型式はこれまで素紋縁とみていたが、今回、当初范では忍冬紋縁(36型式a、11)で、後に素紋縁に改范した(36型式b)ことがわかった。

道具瓦 南面回廊周辺を中心に面戸瓦と熨斗瓦が多量に出土した。土坑SK369からは焼成前に凹面にヘラで文字を記した熨斗瓦が1点出土。幅5.1cm、現存長19.5cm。下端を欠失する。釈文は、

〔以カ〕
「□罪在百之刑□」

最後の文字は下半分を欠き判読不能。「百之刑」で思い当たるのは律の笞杖徒流死のうちの杖、百叩きの刑。大宝律は大宝元年(701)8月に完成、翌大宝2年(702)7月読習、10月14日大宝令とともに頒賜された。このヘラ書き熨斗瓦は、凸面にハ字状縄叩きをもつ本薬師寺創建期の瓦である。土坑SK368で西塔関係の瓦と伴出したが、大宝律とはほぼ同時期の刑罰に関わる記載として注目される。

1995-3次調査出土瓦

軒瓦は軒丸瓦28点と軒平瓦34点の合計62点、道具瓦は面戸瓦3点と熨斗瓦25点である。平瓦には「右」刻印平瓦1点がある。このうち、調査区東端の瓦溜SX410から、軒丸瓦25点、軒平瓦27点、面戸瓦3点、熨斗瓦18点と刻印平瓦1点が出土した。それ以外は、機械掘削の排土からの採集。SX410出土瓦について詳述する。

軒丸瓦は、6121A(16点)、6121B(4点; Ba3点、Bb1

表3 本薬師寺1995-1次調査軒瓦等集計表 ()は種不明を含む

軒丸瓦型式	点 数	軒平瓦型式	点 数	軒丸瓦型式	点 数	軒平瓦型式	点 数
6121 A	2	6641 G	4	薬師寺32	4		
B	1	H	58	33	1		
6276 Aa	55	I	34	36 a	1		
Ab	17	K	25	36 b	1		
Ac	10	O	38				
E	58	6647 Cb	1	平安時代計	12(15)		0
6304 E	1	Cc	3	近世以降	(1)		(5)
型式不明	(7)	G	4	合 計	156(169)		162(178)
		I	11	熨斗瓦	255	隅切平瓦	2
		三重弧紋	2	面戸瓦	67	刻印平瓦	2
		四重弧紋	2				
		重弧紋	(1)				
奈良以前計	144(153)		162(173)				

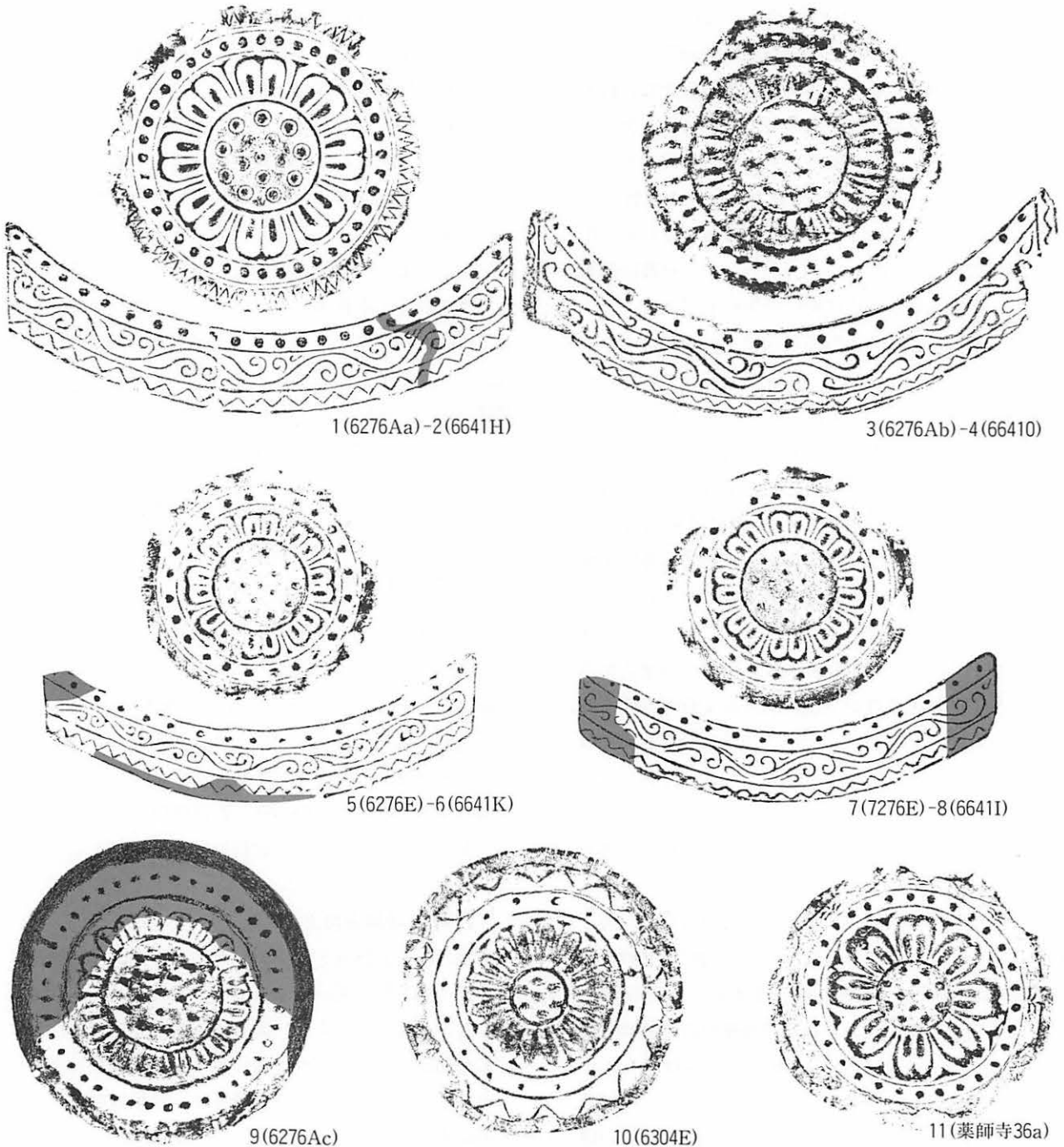


図33 本薬師寺1995-1次調査出土軒瓦 1:4

点)、6121C (1点)、6276Aa (4点) の25点。

6121A (図34-1) は単弁八弁蓮華紋。弁と子葉は中央が大きくくぼむ。中房蓮子1+5+9。蓮子には周環がある。外区珠紋数40、線鋸齒紋数80。線鋸齒紋の内側に二重の圈線がめぐる。丸瓦部は凹凸両面にやや太い斜格子刻み目、端面にも刻み目を入れて瓦当裏面の高い位置に差し込まれる。6121B (3・4) はAに似るが弁がやや細くかつ小さく、間弁先端がT字形。中房蓮子1+4+8。蓮子に周環はない。珠紋数40、線鋸齒紋数80。線鋸齒紋は鋭く珠紋との間に圈線がない。蓮子の小さいBa (3) とこれを大きく彫り直したBb (4) がある。Bbは初出。6121C (5) はBに似るが弁がやや大きく、蓮子の配置が違う。中房蓮子1+4+8か。珠紋と線鋸齒紋の間に圈線なし。6121Cは初出。6276Aa (2) は複弁八弁蓮華紋。蓮弁の照りむくりは弱い。中房蓮子1+5+9。蓮子周環がある。珠紋数40、線鋸齒紋数80。両者の間に二重の圈線がある。

軒平瓦は、重弧紋5点 (三重弧紋1点・四重弧紋1点)、6647Cc (8点) およびCbかCc (2点)、6647G (11点) と型式不明1点である。三重弧紋は瓦当厚が小さい。側面を斜めに切った隅軒平瓦。四重弧紋 (6) は弧線の太さがすべて同じ幅で、凹線は浅い。6647G (7) は、8回反転の右偏行忍冬唐草紋。本薬師寺所用。珠紋数37、線鋸齒紋数59。鋸齒紋の上下は界線に接する。タテ縄叩きで凹凸面を丁寧に調整。6647Cc (8) は5回反転の右偏行忍冬唐草紋。珠紋数27、線鋸齒紋数39。線鋸齒紋の上下は界線に届かない。藤原宮所用6647Caの紋様を全体に太く彫り直した6647Cbを、さらに左右で珠紋半個分切り縮めたのがCc。Cb・Ccともに本薬師寺所用で藤原宮からは出土しない。CaとCb・Ccの製作技法を比較すると、Caは平行叩きだが、Cb・Ccはタテ縄叩き。また、Caでは平瓦部凸面に重弧紋風の刻みを入れて顎を接合するが、Cb・Ccは指で横方向に浅いくぼみを付けるにとどまる。

丸瓦は個体識別で28個体、玉縁の隅数計測法で18個体あり、すべて玉縁式。本屋根用と裳階用がある。本屋根用は、玉縁長7.1cm、玉縁先端幅12.8cm、筒部長38.2cm、段部幅16.6cm、筒部広端幅18.2cm、全長45.3cm (以上すべて平均値) である。粘土板巻き付け作りで、筒部と玉縁を一連の粘土板で作り、段部凸面に粘土を足す。凸面はタテ縄叩きのあと丁寧にヨコナデ調整する。青灰色で

硬質のものと、灰白色でやや軟質の2種がある。側面の面取りは凹凸両面と凹面のみが各々約4割ずつある。裳階用は1点確認できたのみ。筒部広端幅13cmあり、本屋根用の約7割の大きさ。製作技法は本屋根用と同じである。

本屋根用丸瓦の凹面の布圧痕を観察すると玉縁の縫い目は丸瓦1個体に2箇所程度、1つの模骨で4箇所程度ある。縫い方には逆三角形のダーツをとって縫うものと、縦に1~2cmほど重ね合わせてまっすぐ縫うものがある。後者の布の重ね合わせはSタイプで縫い方はまっすり縫い。針目は大半が布の折り山を手前にして左上り右下がりになる。この縫い方では下にいくに従い縫い目の左右で布目にみだれが生じるが、布目が一切乱れないものもある。玉縁部での布袋の縫い目を識別することにより、同一布袋で作られた丸瓦を3組確認できた。うち2組は分割角度が54度と73度ずれる。これらの角度だと分割突帯はなかったようだが、もう1組はほぼ同位置で分割されていて、多くの資料で検証する必要がある。3組の丸瓦は、それぞれ凸面のナデ調整に程度差があり、瓦工の違いを示す可能性がある。

平瓦には通常の大きさの本屋根用と小型品の裳階用がある。本屋根用は、全長41.4cm、広端幅30cm、狭端幅25.6cm (平均値)。裳階用は、全長28.9cm、広端幅23.3cm、狭端幅19.8cm (平均値) あり、本屋根用の約7~8割程度の大きさ。粘土板桶巻き作りで、凸面はタテ縄叩き。縄叩き目は、糸が線状で太いものと細いもの、縄の撚りが明瞭なものの3種があり、裳階用は太い線状の縄叩き目、本屋根用は大半が細い縄叩き目である。縄を三つ編みにした「ハ」字形の縄叩きは1点もない。凹面は丁寧なナデ調整がなされており、広端側1/3ほど以外は布目は残らない。側面の面取りは凹凸両面が約8割、広端の面取りは凹面のみと無いものがほぼ半々、狭端の面取りは凹面のみが半分で、凹凸両面が約3割をしめる。本屋根用は大半が灰白色だが、青灰色で硬質に焼きあがっているものもあり、それらは凸面狭端側をヨコナデ調整する。

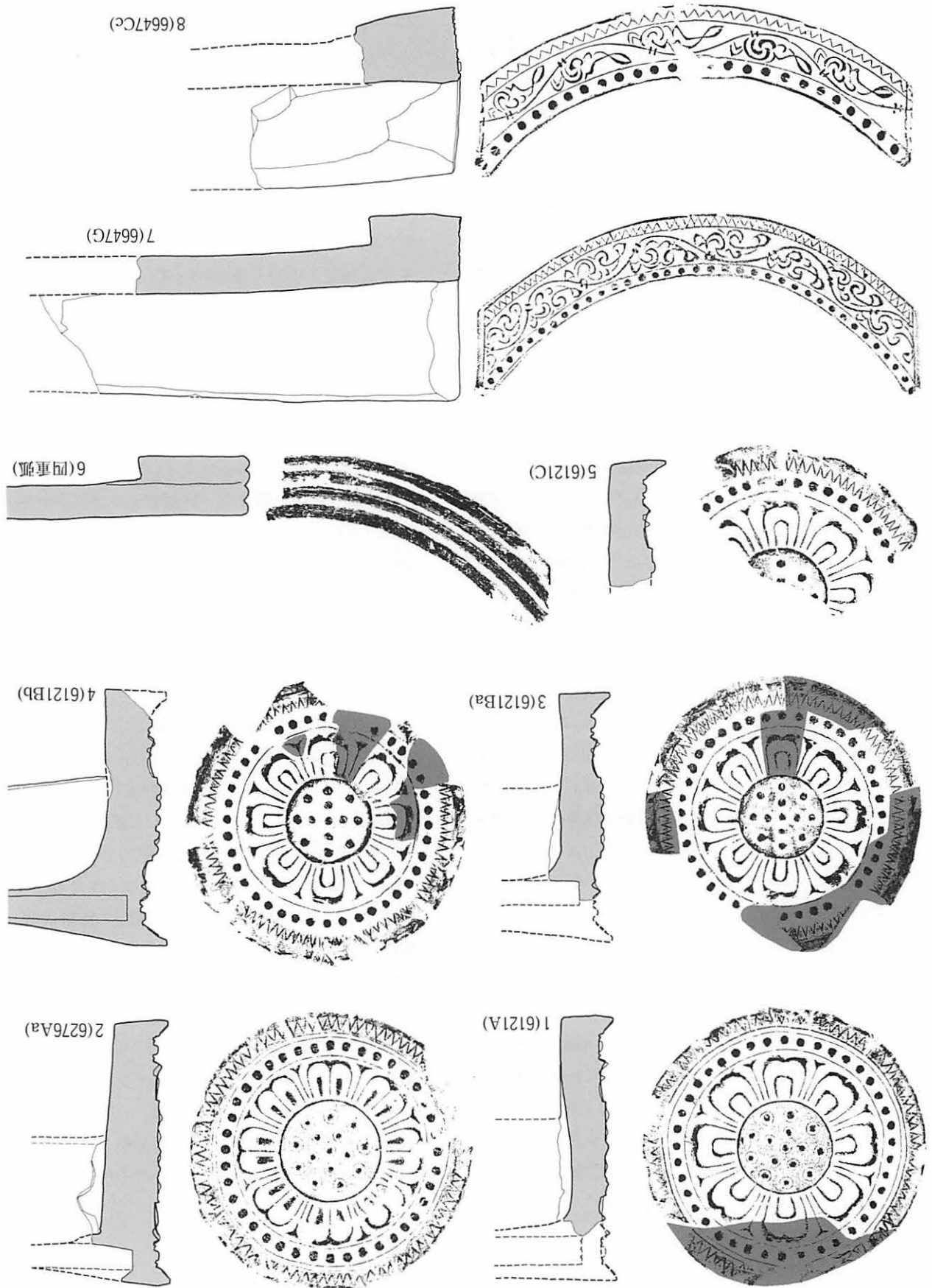
小 結

本薬師寺1995-1・3次調査で出土した瓦は、いくつかの重要な問題を提起する。これを簡単にまとめよう。

まず、1995-3次調査瓦溜SX410出土瓦は次の点で注目できる。

1: 軒丸瓦に占める6121型式の比率が高い。しかも6276

図34 本薬師寺1995-3次調査瓦溜S×410出土軒瓦 1:4



Aaを含めいずれも瓦範がシャープである。

2：軒平瓦は重弧紋と6647型式で、6641型式がない。

3：本屋根用と裳階用の瓦がある。

4：造瓦組織が左右に区別されていた可能性を示唆する「右」の刻印がある。

昨年度の参道の調査（1994-1次調査『藤原概報26』）で、金堂所用の本屋根用軒瓦を6121A-6647Gと推測したが、SX410出土瓦はそれを証明する。創建金堂の軒先はこのセットと、6121Ba・Bb-6647Cb・Ccで飾ることが企画され、瓦が調達されたことは間違いない。

裳階用軒瓦（6276E-6647I）は出土しなかったが、裳階用の丸瓦と平瓦が出土した。しかも、それらは本屋根用の瓦と同じ技法で製作されている。これは金堂の裳階が当初から計画・造作されたことを物語る。

平瓦に「右」の刻印が1点ある。これまで出土した「左」・「右」の刻印をもつ平瓦を再度検討したところ、これらはすべて撚りの細いタテ縄叩きだった。つまり、「左」・「右」の刻印平瓦は金堂所用に限定できる蓋然性が高い。左右が製作組織の別を示す考古資料には、奈良時代後半の木造百万塔がある。本薬師寺金堂の造瓦組織も同様の構成をとっていた可能性がある。

次に、1995-1次調査で出土した瓦について問題を整理する。この調査で出土した西塔の軒瓦は新旧二つの様相が混在する。古い様相を示すのは6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kで、これは東塔と共通する。新しい様相は6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iの2組。6276Aの彫り直しによって前後関係は明らかだ。後者では裳階用のセットは平城薬師寺と同じだが、本屋根用のセット6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土していない。

西塔は基壇土から金堂所用軒平瓦6647Ccが出土したので、基壇築成は金堂完成を遡らない。所用軒瓦から西塔の創建時期について、次のような仮説を提示できる。

1：東塔とほぼ同じ時期に、6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kで創建。6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iで大規模な葺き替えが行われた。

2：創建時期は、6276Ab・Ac-6641Oと6276E（厚型）-6641Iの時期。これに6276Aa-6641Hと6276E（薄型）-6641Kのストック分を加えて屋根を葺いた。

要は、新旧いずれのセットを主体とみるかだ。

1の場合、東塔にはそのような状況がないので西塔は建立後に大規模な修理が必要とされたか、あるいは移築に伴う再建の可能性も考慮の余地をもってくる。ただし、解体・再建を示す足場穴は検出されていない。

2の場合は、西塔の建立がほかの堂塔に比べてかなり遅れる。6641G・H・Oの3種は、H→G→Oの順に製作された。Hは紋様が最も整齐で、東塔や中門・回廊の創建軒平瓦。GとOとの紋様の系譜関係は先に述べた。6641Gには6276Aa・Abが、6641Oには6276Ab・Acが組む。本薬師寺では、6641Gはごく少量しか出土しないが、逆に6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土しない。さらに裳階用軒平瓦6641Iは平城薬師寺創建瓦の一つ。しかも、西塔出土6641Iにはかなり範傷があるから、平城薬師寺の造営が一段落してからこれらの瓦が本薬師寺に供給されたとみてよい。とすると、西塔の瓦の製作供給時期は奈良時代に降り、『続日本紀』文武2年（698）10月4日条の「薬師寺の構作はばおわる」の時点で、西塔は建ち上がっていなかった蓋然性が高くなる。その場合、完成直前に焼け落ちた大官大寺の伽藍配置との関連が問題となろう。

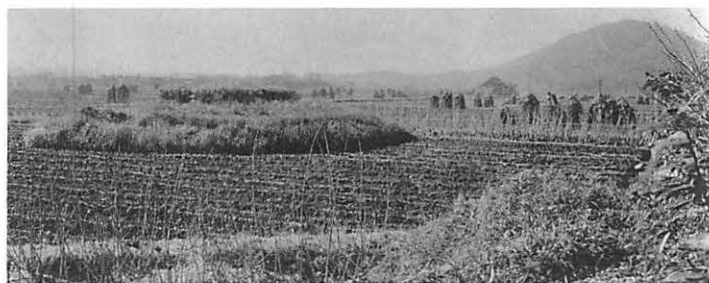
（花谷 浩／考古第1）

コラム：あすかふじわら②

◆60年前の本薬師寺西塔跡

金堂土壇から西塔跡を望んだ写真。周囲は一面の田園地帯。背後の山は、畝傍山。本薬師寺や藤原宮の調査研究に大きな足跡を残した足立康『薬師寺伽藍の研究』（日本古文化研究所報告 第五 1937年）から転載。西塔跡は1996年に初めて発掘調査の手が加わった。橿原市城殿町所在。24頁参照。

（C）



◆藤原京の範囲

藤原京の京城については、1968年岸俊男によって、古代の幹線道に囲まれた東西2.1km、南北3.2kmの範囲に、東西8坊、南北12条分の条坊が復原され、それが定説となった。奈良国立文化財研究所では、1969年以来その成果を受け、藤原京跡の発掘調査を担当してきた。しかし周知のように、その後の調査で、岸説の範囲外からも条坊遺構が相次い

で発見され、京城はもっと広がるという、いわゆる「大藤原京」案各種が提出された。そして1996年に至り、大極殿から東西に2.6kmも離れた橿原市土橋遺跡や桜井市上之庄遺跡から、十坊大路とみられる条坊遺構が発掘された。その上、これを東西の京極とみなす所見もあって、宮を中心に置く十里四方の京城案が、現実味を帯びて急浮上してきた。

この京城は、『周礼』考工記に記され

た都の形に類似するが、藤原京がそれを模倣したものと断ずるには、なお検証が必要だろう。また併せて、この広大な都がいつ計画され施工されたのか、京城が十坊以上に広がる可能性はないのか、京城が時期によって伸縮しなかったのかなど、解明すべき課題も多い。その解決には、更なる発掘調査が不可欠で、当研究所では、岸説の範囲を越えて調査対象とするべく、検討を重ねているところである。（黒崎 直）

